

リテラシー実践による「わたしたちの場所」の確保 —A中学校・文芸部のエスノグラフィー—

日本学術振興会特別研究員PD 石田 喜美

1. 問題の所在と目的

本稿では、読むことに関わる中学生・高校生のサブカルチャーのひとつとして「オタク文化」をとりあげ、「オタク文化」に関わる女子生徒たちが日常的に行う読むこと／書くことについてのエスノグラフィックな分析から、読書教育への提言を行うことを目的とする。

「オタク」とは、「アニメ、マンガ、ゲーム、特撮などの熱心なファン」¹⁾(窪田, 2004)を示す。また「オタク文化」とは、「オタク」によって形成され、維持されている文化を広く示す用語である。「『オタク』の祭典」と呼ばれるコミックマーケットの中心的な参加者層は、中学生から30代までだと言われており、「オタク文化」は、中学生・高校生の年代にある生徒たちと密接な関係にある。

実際、「オタク文化」は中学生・高校生が学校内で作り出すサブカルチャーのひとつとして、重要な位置を占めている。たとえば、宮崎(1993)は、ある女子校を対象としたエスノグラフィー調査によって、女子校の生徒たちが作り出す複数の生徒集団のひとつに「オタッキー・グループ」と呼ばれる、「オタク」の少女たちによって構成されるグループがあることを記述している。また石田(2008)は、中学校・高校に課外活動団体として設置されている二つの団体、「イラスト研究部」「現代視覚文化同好会」(団体名は仮名)へのインタビュー調査から、これらの団体の成員である生徒たちが、「オタク」というス

ティグマ化されたアイデンティティとの関係の中で、自らの属する集団を意味づけていることを明らかにしている。これらの研究は、「オタク文化」の存在が、中学生・高校生たちの生活世界の中で重要な意味を持つことを示している。

また、「オタク文化」は、中学生・高校生たちの読むことの実践に深く関わる文化である。前述したように、「オタク」とは「アニメ、マンガ、ゲーム、特撮などの熱心なファン」、すなわち「読者」(audience)であり、「オタク文化」はそれら熱心な「読者」たちによって作り出され、維持される文化である。そのため、「オタク文化」全体、あるいは「オタク文化」の中に存在する多数のサブカルチャーにおいて、読むことの実践は重要な意味を持つ(石田, 2007, 金田, 2007)。例えば金田(2007)は、「オタク文化」の下位文化のひとつである「腐女子文化」²⁾をとりあげ、「腐女子文化」が特定の解釈コードを共有する「解釈共同体」(フィッシュ, 1992)として機能していると指摘する。そのため、中学生・高校生の読書環境、特に、アニメやマンガ、ゲーム等をも含めた広義の「読書」環境を考えると、「オタク文化」という視点はひとつの有効な示唆をもたらすと考えられる。

しかし、これまでの読書教育に関する議論は、中学生・高校生たちのサブカルチャーを「軽いもの」「有害なもの」として非難する傾向にあった。それは「少女小説」「ライトノベル」等の活字メディアにおいても同様であり、例えば、本谷(1992)は、自身が勤務する中学校の女子生徒たちが「折原みと」という作家による「少女小説」に夢中になっていることに触れて、以下の意見を述べてい

* Literacy practice as a protection strategy for *one's own place*: An ethnography of a literary club at a Junior High-School

** ISHIDA, Kimi (Japan Society for Promotion of Science Research Fellow)

る。

「軽い読書、雰囲気ではじめた読書であっても、読んで批判できる力を養うこと。与えられた借りものの言葉でなく自分の現実と向き合う、自分の言葉がもてるように働きかけていくこと。折原みとを離陸し、そこから抵抗なく、純文学へ着陸できるようにしていくこと。——私のこれからの課題である。」

上の引用において、本谷は「折原みと」による「少女小説」を、いつかは「離陸」すべきものとし、その前提に基づいて意見を述べている。このとき、「少女小説」はあくまで、「純文学」に到達するための準備段階・途中段階であり、「少女小説」に夢中になる女子生徒たちはその準備段階・途中段階に位置づけられている。

このように、純文学の読書を理想的なものとして位置づける視点は、中学生・高校生たちが親しむサブカルチャーに批判的なまなざしを向け、彼ら／彼女らによる実践を準備段階・途中段階として位置づける。しかし、この視点は、生徒たち自身が創造してきたサブカルチャーが持つ教育的意義を、不可視的なものにしてしまう危険性がある。

そこで本稿では、読むことに関わる中学生・高校生のサブカルチャーである「オタク文化」に焦点を当て、「オタク文化」に関わる生徒たちが「物語」⁹⁾を読むこと・書くことに対して見出している意味を記述する。具体的には、ある中学校に設置されたクラブ活動団体である「文芸同好会」に参加する女子生徒たちのエスノグラフィーから、彼女たちにとっての「物語」の意味を明らかにする。最後に、このエスノグラフィーの成果を踏まえた上で、今後の読書教育に対する提言を導きだす。

2. 調査方法・分析方法

2.1. 調査方法

本研究では、東京都内にあるA中学校のクラブ活動団体、「文芸同好会」(仮名)に対し、エスノグラフィック・インタビューを実施した。エスノグラフィック・インタビューとは、半構造化インタビューとして分類されるさ

まざまなインタビュー法のひとつであり、「インタビュー場面」として定められる明確な時間や空間の枠組みを持たないことを特色とするインタビュー方法である(フリック, 2002)。エスノグラフィック・インタビューにおいて調査者は、フィールドで出会う人々との自然でうちとけた会話の中で質問を行い、それに対する人々の応答を聞きとる。そのため、研究テーマと直接関わりのない雑談も多く行われる。エスノグラフィック・インタビューとは、そのような雑談の中で自然発生的に展開する質問と応答のやりとりである。本研究では、できるだけ自然な状況で生成される会話データを収集するため、この方法を用いた。

インタビューは、2005年11月28日の放課後の時間帯を利用して行われた。インタビューの所要時間は40分程度である。インタビューに協力した生徒数は7名(全員、女子生徒。3年生が5名、1年生が2名)である。会話データはすべて、カセットテープレコーダーに録音するとともに、インタビューの様子をフィールド・ノートに記録した。

また、このインタビューが実施される以前(2005年11月3日)に開催された、A中学校の文化祭においてフィールドワーク調査を実施した。この調査の中で、文化祭当日における「電腦電子文化研究会」「イラスト研究部」「文芸同好会」(団体名はすべて仮名)の生徒たちの様子をフィールド・ノートに記録するとともに、文化祭において配布されていた「イラスト研究部」「文芸同好会」発行の部誌を入手し、これらのデータを分析のための資料として用いた。また「イラスト研究部」については、2005年11月10日にインタビュー調査を行っており、そのときに記入したフィールド・ノートも、分析のための補助資料として用いた。

2.2. フィールドの概要

A中学校は都心に存在する、国立A大学附属の教育機関である。A中学校の生徒のうち一定の割合の生徒は、初等教育を行うことを使命とする国立A大学附属小学校

の出身者（「内部進学者」）であり、残りの生徒は、A中学校の入学試験に合格して入学した生徒（「外部入学者」）である。A中学校は、「生徒自らの手によって創り出す自主的な活動」を重視しており、「生徒会活動」（生徒会・委員会など）や「クラブ・研究会活動」（部活動・クラブ活動）などにおいては、生徒自身による企画・運営がなされるよう教育的な配慮が行われている（A中学校『学校案内』、フィールド・ノート（2005年11月3日）より）。以下の表（表1）は、A中学校における課外活動団体（「クラブ・研究会活動」）を一覧表にしたものである。

この表に示された団体のうち、「電腦電子文化研究会」「イラスト研究部」「文芸同好会」は、ゲームやマンガ・アニメ、小説など、さまざまなメディアによる「物語」の創作・受容に関わる活動を行っている。そのため、これらの団体は、同じく、「物語」の創作・受容に関わる「オタク文化」となんらかの関係を持たざるを得ない。しかしこれら3つの団体は、それぞれ「オタク文化」と異なる関係を形成している。以下、これらの団体と「オタク文化」との関係について説明することによって、本稿が分析の対象とする「文芸同好会」の位置づけを確認しておきたい。

「電腦電子文化研究会」は男子生徒のみで構成されており、団体内部で、男性的な「オタク文化」が形成されている団体である。これに対し、「イラスト研究部」「文芸

同好会」は女子生徒のみで構成されており、「オタク文化」の中でも、「腐女子文化」を中心とする女性的な「オタク文化」と関係がある。

このうち、「イラスト研究部」は「オタク文化」との関わりを拒否し、自分たちが「オタク」ではないことを積極的に示そうとする団体である。彼女たちは、自分たちの団体で発行する部誌を、「オタクでないことを示すもの」と述べる（「イラスト研究部」インタビューより）。これに対し、「文芸同好会」の部員は、積極的に自分たちが「オタク文化」の成員であることを示そうとする。特にその傾向は、「文芸同好会」の全部員8名中6名をしめる3年生部員に強く、インタビュー中、3年生の女子生徒たちが、1年生の女子生徒と対比させるかたちで、自分たちの文化を「オタク文芸」（インタビューでの太田（仮名）（3年生部員）の発言より）と称する場面も見られた。このことは、「文芸同好会」特に、「文芸同好会」の中でも3年生6名によって構成されている文化が「オタク文化」と密接に関係していることを示している。

3. 「オタク文化」に関わる女子生徒たちの隠された美意識

3.1. 自分と作品との関係性を隠す手段としての「ペンネーム」
「文芸同好会」の部員たちと「物語」との関わりを考え

表1：A中学校における課外活動団体（A中学校「学校案内」をもとに作成。団体名は仮名。）

運動部		研究会	
水泳部	陸上競技部	音楽研究会	鉄道研究会
蹴球部	籠球部	化学研究会	演劇研究会
軟式庭球部	ダンス部	<u>電腦電子文化研究会</u>	アジアの子供の会
硬式庭球部	剣道部	美術研究会	合唱研究会
排球部	バドミントン部	<u>イラスト研究部</u>	家庭科研究会
野球部	ハンドボール同好会	天文研究会	<u>文芸同好会</u>
計12団体		計12団体	

る上で重要なのは、「ペンネーム」の存在である。「文芸同好会」の部員たちは、すべて、同好会発行の部誌に作品を発表する際、作者名に「ペンネーム」を用いている。「イラスト研究部」の部員たちも同様に、部誌に作品を発表する際には全員作者名に「ペンネーム」を用いる。自身の実名を用いて作品を発表する生徒は皆無である。男子生徒のみで構成される「電腦電子文化研究会」は部誌を発行していないため、男子生徒によって形成される「オタク文化」の中での「ペンネーム」の実態は定かではないが、少なくとも「オタク文化」に関わりを持つ女子生徒たちの間では、作品を発表する際に「ペンネーム」を用いることが慣習となっている。

では、なぜ彼女たちは自分の作品を発表する際に「ペンネーム」を用いるのだろうか。「ペンネーム」は彼女たちにとってどのような意味があるのだろうか。

今田(2007)は、明治から昭和にかけて発行された少女雑誌『少女の友』を分析し、当時の少女たちにとっての「ペンネーム」が以下の三つの機能を持っていたと指摘する。三つの機能とは、①本名を隠す自衛手段としての機能、②日常の中にある生身の肉体を覆い隠し、「少女」

という虚構の中に彼女たちを絡めとる機能、③「少女ネットワーク」(今田, 2007)の一員であることの証としての機能である。もちろん、明治・大正時代の女子生徒たちと、現在の女子生徒たちには大きな隔りがあり、今田による指摘をそのまま現在の文脈に置き換えることは不可能であろう。そうであるとすれば、なぜ、女子生徒たちは、明治・大正時代と現代という時代の隔りを経てもなお、「ペンネーム」を用いるのだろうか。

この点について明らかにするため、まず、彼女たちが実際にどのような「ペンネーム」を用いているかを明らかにしておきたい。以下に示すのは、「文芸同好会」や「イラスト研究部」の部員である女子生徒たちが、自らの作品に付している「ペンネーム」である(表2・表3)。どちらも、A中学校の文化祭において発行されていた部誌を資料とし、そこに掲載されていた「ペンネーム」を表記によって分類したものである。

表2・3の中で、何よりもまず目につくのは、日常的にあまり用いられない漢字が組み合わされた「ペンネーム」である。特に、「イラスト研究部」の部誌に用いられる「ペンネーム」には、「樂」「霖」など、日常生活では

表2：ペンネーム一覧(文芸同好会)(文芸同好会誌『Fi+』2005年秋号をもとに作成)

文 芸 同 好 会	漢字表記	「頂風」「庵」「知泉」「扇怜」「毬
	ひらがな表記	「ひよどり」
	アルファベット表記	「Dolphin」「hakari」
	数字・そのほかの記号による表記	「346」

表3：ペンネーム一覧(イラスト研究部)(イラスト研究部誌『えむかりめ』2003年・2005年秋号より)

イ ラ ス ト 研 究 部	漢字表記	「凜太」「苹果」「夏瀬」「江戸那」「壱」「流那」「紫櫻」「藍瑠」「樂」「果樹花絵」「葵」「霖雨」
	ひらがな・漢字表記	「のほほん茶」
	ひらがな表記	「あたりめ」「かまあげうどん」「わかめ」
	カタカナ表記	「バブ」
	アルファベット表記	「TAMA」「YÜYA」「AL」「Mari」「AYA」「Hinata」「Beth」

ほとんど目にしない漢字が使われているものもある。実際、「樂」という「ペンネーム」を持つ女子生徒は、部誌のコメント欄に、「改めまして、樂です。読めますか？(笑)もし読めないのならば漢和辞典で調べてください!!」

(イラスト研究部誌『えむかりめ』より)というコメントを寄せている。このことから、彼女自身も「樂」という漢字が、多くの読者にとって読むことの難しい漢字であると認識していることがわかる。

また、漢字表記によるその他の「ペンネーム」も、「頂風」「知泉」「果樹花絵」など、使用されている漢字自体は身近なものでも「ペンネーム」としての読み方がわからないもの、「庵(いおり)」「葵(あおい)」など、おそらく中学生の彼女たちにとっては「特殊な読み」と映るような、漢字の訓読みを利用したものなどが多い。それは、あたかも、「ペンネーム」そのものが、部誌の読者全員に対して「読めますか？(笑)もし読めないのならば漢和辞典で調べてください!!」というメッセージであるかのように、彼女たちの「ペンネーム」には「特殊な漢字」「特殊な読み」が、散りばめられている。また、ひらがな表記(ひらがな・漢字表記を含む)やカタカナ表記の「ペンネーム」は、「ひよどり」「かまあげうどん」

「わかめ」など、逆に、単語そのものの意味は明快であっても、作者自身との関係がわかりにくいものが多い。

これらと対照的に、アルファベット表記による「ペンネーム」は、読み方も名付けの由来も明快である。これら、アルファベット表記による「ペンネーム」の多くは、生徒自身の本名の一部や日常的に使われているあだ名をアルファベット化したものである。これらの「ペンネーム」は「文芸同好会」「イラスト研究部」に入部したばかりの新入生によって用いられる傾向がある。しかし、新入生の一部も、二年生・三年生と同様に「特殊な漢字」「特殊な読み」を散りばめた漢字表記による「ペンネーム」を用いていることから、自分の名前やあだ名等の一部をアルファベット化した「ペンネーム」は、「文芸同好会」・「イラスト研究部」の文化の中では、「ふさわしいもの」として位置づけられていないことがわかる。実際、

自分の本名を推察することができるような「ペンネーム」は、部誌の「ペンネーム」としてはふさわしくないとやわんばかりに、新入生たちはその後の部誌の発行に合わせて自分の「ペンネーム」を変化させていく。そのため部誌のコメント欄には時おり、「ペンネーム変更3回目…(汗)ごめんなき〜い>_<」(イラスト研究部誌『えむかりめ』より)等、「ペンネーム」を変更した旨を述べるコメントが付されることがある。また、このようなコメントがないままに「ペンネーム」が変更されることもあり、「ペンネーム」の変更は、ごく自然なこととして受け入れられている。

生徒自身の本名を推察させるようなアルファベット表記による「ペンネーム」から、「特殊な漢字」「特殊な読み」を散りばめた漢字表記による「ペンネーム」や意味のわかりにくいひらがな・カタカナ表記の「ペンネーム」への移行は、いったい何を意味しているのだろうか。

これについて考察するため、以下、「文芸同好会」の部員たちによる「ペンネーム」についての語りを分析する。事例1は、本名ではなく「ペンネーム」を用いることについて、「本名で出すのはイヤなの？」とインタビュアーが尋ねたことから生じた相互行為である。

インタビュアーによる「本名で出すのはイヤなの？」(1-1)という問いに対し、「文芸同好会」の部員たちは、間髪入れずに「絶対無理」(1-2)「まさかだし」(1-3)と答えている。また、1-7で知念(仮名)(3年生部員)が、自分の「ペンネーム」について、「てかうち、本名わかっちゃうんだよね」と述べており、これは、本名が簡単に推察されるような「ペンネーム」が、「ペンネーム」としては「ふさわしい」ものでないことを表明した発言であると解釈できる。これらのことから、彼女たちにとって「本名を隠す」という実践が重要な意味を持つこと、また「ペンネーム」はその実践を行うための重要な手段であることがわかる。本名を類推させるような、アルファベット表記による「ペンネーム」が彼女たちの文化において「正当なもの」「ふさわしいもの」と位置づけられていないことについては前述したが、このことも「本名を

事例1：文芸同好会：ペンネーム1⁴⁾

1-1 インタビュアー（以下，I）：本名で出すのはイヤなの？やっぱ＝

1-2 関根（以下，S）：＝あ＝絶対無理＝

1-3 不明（以下，X）：＝まさかだし。

[

1-4 平野（以下，H）： ああ，うん。ウフッ

[

1-5 別所（以下，B）： てか画数多いし（笑）＝

1-7 知念（以下C）：＝てかうち，本名わかつちゃうんだよね＝

1-8太田（以下，O）：＝アハハハハ，そうだね。他人にわかりにくい世界を書いているから。

[]

1-9 I： がんばれ。

1-10C：ウフフフ

[

1-11 I：あ――。やっぱり，ほん＝本名だと，（・）バレるのがやだっていうことなの？

1-12C：え，なんか，読んだときに，あの人が書いてんの，うふふ，って思わ（れるのが）

[

1-12O: アハハハハハ（（一同笑う））

1-13O：今，（うーふう，おかし）アハハッ，アハハッ

1-14 I：へ――。そうなんだー。

[

1-15O： こん＝おもしろいと思われてもイヤなんだよね＝

1-16C:＝イヤなんだよね。

隠す」という実践の重要性を示している。

実際、「ペンネーム」を用いる理由について知念(仮名)(3年生部員)は、「読んだときに、あの人が書いてんの、うふふ、って思われるのが(嫌だ)」(1-8)と述べる。「あの人が書いてんの、うふふ」とは、一見、自分が書いた作品に対し嘲笑のまなざしを向けられることを意味していると解釈できるが、この発言が意味していることはそれだけではない。その後、1-12から1-13で太田(仮名)(3年生部員)と知念が重ねて発言しているように、作品そのものが「おもしろいと思われても」(1-12)、すなわち、たとえ作品そのものが嘲笑や軽蔑の対象とならずに高く評価されたとしても、作品とその作者である生徒自身が結びつけられてしまうことそのもの——まさに「あの人が書いてんの」と思われることそのもの——が、彼女たちにとって忌避すべきこととして語られる。彼女たちは、自分たちが書いた作品そのものの評価如何に関わらず、作品と自分自身との関係性を隠そうとする。そして、「本名を隠す」という実践は、そのための重要な手段として位置づけられている。

3.2. 「隠す」ことの意味：「わかりにくい世界」を「わかりにくい」ままにしておくこと

では、なぜ、自分が書いた作品と自分自身との関係性を「隠す」ことが彼女たちにとって重要な意味を持つのか。その答えを知るための鍵となるのは、太田による「そうだね。他人にわかりにくい世界を書いているから」(1-8)という発言とその後の「おもしろいと思われてもイヤなんだよね」(1-15)という発言である。「おもしろいと思われてもイヤなんだよね」という発言は、「他人にわかりにくい世界」を、他人に理解されることへの忌避の表明と解釈できる。ここでは「おもしろい」と思われること、すなわち、自分自身の世界を理解されることそのものが太田にとって忌避すべき対象となっている。「他人にわかりにくい世界」ではあるけれども、その世界を他人に理解してもらいたいわけではない。むしろ、「他人にわかりにくい世界」を「わかりにくい」ままにしておくこと

それが重要であり、その「世界」がさまざまな人々に理解され、「わかりやすい」と評価されることは、彼女にとってでは忌むべきことなのである。

この「『わかりにくい世界』を『わかりにくい』ままにしておきたい」、「他人に理解されない自分自身の『わかりにくい世界』を守っていたい」という彼女たちの願いは、自分自身と作品との関係性を「隠す」という実践へと向かっていく。同時に、その願いは自分たちとは対照的に、「わかりやすい世界」を描き、他人に自分たちの「世界」を積極的に公開するような女子生徒への非難のまなざしへと結実する。

以下に示す事例2は、事例1の後に展開された相互行為である。事例2に示されているのは、「イラスト研究部」の部員たちに対する非難のまなざしである。「文芸同好会」の部員たちは、「イラスト研究部」の部員たちを「何も考えずに書いている」「世界とかをはっきり言ってあんまり考えない」人々(以上、「文芸同好会」インタビューより)と評する。事例2ではさらに、部誌を頻繁に(年四回)発行し、さらにそれをA中学校の全クラスに配布するという「イラスト研究部」の実践に対して非難のまなざしが向けられる。

「クラブ・研究会活動」が、A中学校の特別活動の一環として位置づけられていることを考えれば、年四回「部誌」を発行するという「イラスト研究部」の活動は、積極的な活動として評価されるべきものである。また、「イラスト研究部」の部員たちは、インタビューの中で、「『イラスト研究部』は『オタク』だ」という偏見をなくし、イラストが好きなことに対して抵抗をなくしてもらうために、部誌を年四回の頻度で発行し教室に配布していると述べており(「イラスト研究部」インタビューより)、「イラスト研究部」の活動も彼女たちなりの正当な理由に裏付けられていることがわかる。

しかし、「文芸同好会」の部員たちから見れば、学校から評価されうる積極的な活動を行い、他人に理解されることを求めて自分たちの作品を発表することは、「恥ずかしい」(2-12)ことであり、彼女たちは、そのような「恥

事例2：文芸同好会：ペンネーム2

2-1 インタビュアー(以下, I)：そっかバレるのヤなのか。でもあれでしょ？えーでもこの部誌ってさあ。あれでしょ？クラスに(・)配るんじゃないの？

2-2 太田(以下, O)：配らなかった＝

2-3 不明(以下, X)：＝配らなかった＝

2-4 琴野(以下, K)：＝来なかった。

2-5 I：あ！イラ研 [[イラスト研究部の略称]] は配ってるけどこっちは配んないんだ。

2-6 (・)

2-7 O：イラ研よく配るよね。

2-8 K：ねー。

[

2-9 X：ねー。

[

2-10 関根：てかイラ研はなんか、まあ、見るだけだから。

[]

2-11 別所(以下, B)：部誌ってかアレだから。

2-12 O：恥ずかし!

2-13 X：エへへへへ ((一同笑う))

2-14 B：こっちはなんか、あの、乙女だから。

2-15 X：アハハハハ ((一同笑う))

た自分自身で創作するさまざまな「物語」は、この人間の「暗い部分」について、彼女たちが自分たちなりの言葉で模索し、人間とは何かを考えていくための「安全な場」(safety place)として機能している(事例4)。

事例4の文章の、一見奇妙にも映る文章レイアウトは、あたかもこの文章が詩であるかのような印象を与え、文章全体に詩的な雰囲気を作り出している。また、主に未成年の男子が使用する「僕」という一人称代名詞を用いた一人称語りの文体は、読者に、透明で硬質な印象をもたせる。このような透明・硬質な文体によって語られるのは、死へとつながることでのみ関係を結ぶことのできる「僕」と「僕」の好きだった「先輩」の淡々としたやりとりである。「先輩」は「僕」にとっては唯一の理解者

である。その「先輩」は「僕」が池に沈み、死の世界へ向かうことを望んでいる。そして、「先輩」自身も、「僕」にそのメッセージを残したあと、自ら樹海の中へ——すなわち、死の世界の中へ——向かってしまう。この「物語」において語られているのは、死の存在を介することによって初めて生み出される人間同士の深い絆ともいえるものである。

もちろん、このような「物語」は、あまりに死を美化しすぎているために、非難されることが多い。しかし、ここであえて残酷な死を美化する「物語」を創作することによって、この作品の作者である女子生徒が追究したものとはいったい何だろうか。おそらく、それは通常では実現しえないような、人間同士の深い絆なのではない

事例4：知泉「籠目籠目」

大好きな先輩は、僕に沈んで欲しかったのだ。

その次の日、先輩は夜に寮の樹海に散歩に行ったり、どこかに消えてしまった。

でも、

先輩がたとえ僕の前から消えても、

その願いは、たぶん今でも、

覆われている。

「自分を持ちなよ。」

先輩は、そう言った。—— やっぱり、僕には、そんなに重いものは背負えないから。

静かに、静かに。

そろりと踵を掻き分けて、

哀れむような目で僕を見る先輩は、僕の一言一言を覚えていた。

少し纏んで、濡れてしまった僕の本書を、まだ、覚えていた。

「嘘ですよ。あんなの。」

全てを、否定する。

自分の淡い期待を、切り捨てる。

そんな僕の中身を、知ってか 知らずか、先輩は何も言わずに僕を見ていた。

沈黙が、僕を突き刺す。何も言わないけれど、先輩は全て知っているのだ。

わかっているのだ。

僕を全て見過がしているのだ。

「ねえ、沈んでみてよ。」

廊下と桜と先輩は、とてもよく似合っていた。長くて黒い先輩の髪を、桜が影る。

美しさに、みとれていた。

だから、その言葉は、何の意味も持たずに僕の中をすり抜けた。

冷たい言葉が、先輩が紡いだことで、柔らかな木漏れ日に溶け込んでいた。

「ネエ、沈んでみてよ。」

その言葉の真意は、今の僕でもわからない。

ただ、先輩はそう僕に命令したのだ。

か。そうであるとすれば、死を美化するという「物語」の表面上の特性のみを非難し、彼女たちから「物語」そのものを剝奪することは、彼女たちから人間存在に対する思索の機会を奪ってしまうことになりかねない。

4. 考察

以上、本稿では、「ペンネーム」を用いるという実践を手がかりとしながら、女子生徒たちにとっての「物語」の意味について考察してきた。彼女たちにとって自分と「物語」との関わりは、隠すべきものであった。金田(2007)は、「オタク文化」に関わる女性たちが、自分が「オタク」であることを隠すためのさまざまな実践を行っていることを指摘する。この背景には、もちろん、社会が「オタク文化」に向ける批判的なまなざしの存在もあるが、それだけではない。彼女たちは、自分が「オタク」であることを隠すという実践そのものを楽しんでおり、この楽しみは、おそらく、「ペンネーム」を用いることで自分と作品との関係を隠すことの楽しみに類似している。ここでは、「隠す」という実践そのものが重要な意味を持つ。

さて、前述したように明治・大正時代の「少女」たちにとって「ペンネーム」は、①本名を隠す自衛手段としての機能、②日常の中にある生身の肉体を覆い隠し、「少女」という虚構の中に彼女たちを絡めとる機能、③「少女ネットワーク」(今田, 2007)の一員であることの証としての機能という三つの機能を持っていた(今田, 2007)。これを踏まえて、本研究の成果をまとめれば、現代の女子生徒たちにとって「ペンネーム」とは、まず何よりも①本名を隠す自衛手段としての機能を持つものであったと言うことができよう。

しかし、明治・大正時代の「少女」たちが「不良少女」というレッテルから身を守るために「ペンネーム」を利用していたのに対し、現代の女子生徒たちは自分自身の「わかりにくい世界」、そしてその世界で展開される自分自身の美意識を守るために「ペンネーム」を用いる。現代において、小説や詩を書くことで「不良少女」という

レッテルを貼られ、大人から非難のまなざしを向けられることはあまりない。しかし、代わりに彼女たちは、大人たちの保護主義的なまなざしから、自分たちの身を守る必要に迫られた。死や狂気、悪などのモチーフは、ともすれば、大人側からの保護主義的な介入によって非難される危険性がある。その介入を防ぐためには、「わかりにくい世界」を「わかりにくい」ままにしておくことで、自分たちだけの「安全な場」を守り続けるしかない。このとき、自分以外の他者に理解されることは、自分たちだけの「安全な場」を奪われる危険性を伴う。

本稿で示した女子生徒たちによる戦略、すなわち、「わかりにくい世界」を「わかりにくいまま」にしておくことで自分たちの「安全な場」を守るという戦略は、現代の女子生徒たちが行うさまざまな読むこと・書くことの実践に見られる。たとえば本田(1996)は少女たちによって書かれた交換日記が『片仮名を交えた』『平仮名綴り』の文章(同上, p.196)であることに触れ、このような表記が、『大人の入国禁止』の秘密の王国』を作り出している」と指摘する。また、「ケータイ小説」について論じた米光(2008)は、「ケータイ小説」の「新しさ」が、「社会的に正しくない」こと、すなわち、乱れた日本語や、描写・表現の稚拙さにあることを指摘した上で、以下のように述べる。

「多くの少女たちの実感や気持ちと一致するためにめんめん」と書かれ、読まれつづけてきた少女のための物語は、ケータイという大人の視線を気にせずには表現できるパブリックな場を持つことで、少女的リアルを獲得できた。大人が希望するように賢くはなく、小説的表現という制度からも解き放たれ、ディテールや社会性などに興味を示さず、大人を排除した少女的リアルを。」

「ケータイ小説」の主な読者層は、宮崎(1993)が「ヤンキー・グループ」と呼んだ女子生徒たちであり(速水, 2008)、彼女たちは「オタク文化」とは異なるサブカルチャーに属する。「オタク文化」とは異なるサブカルチャーに属する彼女たちも、本稿で報告した「オタク文

化]に関わる女子生徒たちと同様に、「大人の視線を気にせず表現できるパブリックな場」を求め、そこで読むこと・書くことの実践を行っている。この事実、中学生・高校生たちの読書環境を考える際に、「大人」側がどのようなまなざしを中学生・高校生に向けるか（あるいは、向けないか）という問題が重要であることを示唆する。「わかりにくい世界」を「わかりにくい」ままにしておきたいという彼女たちの願いが、自分たちなりに思索を深めていくための「安全な場」を奪われたくないという意志に根ざしているのではあるとすれば、我々は再度、中学生・高校生に対するまなざしのありかたを再考する必要があるだろう。

この点を考える上で、リテラシー教育研究の中で1990年代以降登場した「青年期のリテラシー」という概念は、重要な示唆を与えてくれる。1990年以降、中学生・高校生を対象としたリテラシー教育研究は、「中等教育における『読むこと』」(secondary reading) から「青年期のリテラシー」(adolescent literacy)へとそのパラダイムを変化させてきた(Vacca, 1998)。「青年期のリテラシー」とは、中学校・高校段階にあるさまざまな青年たちの間で行われているリテラシー学習を記述しようとする概念である。研究領域としての「青年期のリテラシー」は、青年たちのさまざまなリテラシー学習を対象とするため、いまだ、その研究領域としての固有性を模索する段階にある。が、「青年期のリテラシー」の領域における研究は、社会学や文化人類学、社会言語学の方法論を用いながら、青年たち自身のリテラシーに対する意味づけを記述しようとする点で共通している。これに対し、「中等教育における『読むこと』」の研究領域は、学校やクラスという制度的なコンテクストの中で教える内容として「リテラシー」を捉える。そのため、「青年期のリテラシー」と比べ、「中等教育における『読むこと』」の研究対象は非常に狭いものとなる。

従来主流であった、「中等教育における『読むこと』」のパラダイムは、このように学校という制度的コンテクストにおけるリテラシーのみを問題とするため、青年た

ちが日常的に行うリテラシー実践とは無関係にリテラシーの教育目標を設定してきた。また、この教育目標を理想とした保護主義的なまなざしを青年たちに向け、青年たちが行うリテラシー実践を批判してきた⁵⁾。これとは対照的に、「青年期のリテラシー」のパラダイムは、社会学や文化人類学、社会言語学等の方法論を用いて、中学生・高校生たちが日常的に行うリテラシー実践に対するエスノグラフィックな調査を行う。そして、このエスノグラフィックな調査によって明らかになった、中学生・高校生の実態に基づくりテラシー教育のありかたを考察しようとする。

本稿では、大人側の保護主義的なまなざしへの抵抗しようとする生徒たちの姿を明らかにした。生徒たちがここで抵抗の対象としている「大人側の保護的なまなざし」の中には、従来の読書教育が中学生・高校生たちに向けてきたまなざしも含まれる。冒頭に引用した本谷(1992)による主張、すなわち「折原みと」というサブカルチャーを離れ、そこから純文学へと移行させるべきだという主張は、まさに、読書教育における保護主義的なまなざしを反映している。

今後の読書教育は、このような保護主義的なパラダイムから、生徒たちの実践を中心に据えた「青年期のリテラシー」のパラダイムへと移行すべきではないか。そのためには、中学生・高校生たちの実践を、準備段階・途中段階として位置づけるのではなく、彼らが行う実践そのものの意味に目を向けていくことが必要である。エスノグラフィックな調査は、そのための有効な手段となりうる。中学生・高校生の年代にある生徒たちが、どのように本や「物語」と出会い、それをいかに意味づけているのか。また、自分たちが行う実践の中でどのような学びを生成しているのか。今後は、このような視点から、彼らが行う実践を丁寧に記述し、その実践に基づいた読書教育の理論や実践を探求していくことが課題となる。

注

1) 窪田(2004)の「オタク」の項には、「2次元ロリ(ロ

リコン) ファンで、やや対人関係に難がある人々を刺指した言葉」という定義も示されている。この定義は「オタク」の中でも男性の「オタク」を示した定義であるため、本稿ではこの定義を用いない。なお、「リコン」とは、「ロリータ・コンプレックス」の略語で、幼女・少女に対する男性の性的・恋愛的な関心を意味する。

- 2) 「腐女子」とは、「『やおい』や『ショタ』の作品の作家やファンなど、同人、おたく系の女性に対する俗称」(窪田, 2004) である。なお、「やおい」とは、「女性向けの男性同性愛を扱った作品ジャンル」(同上)を意味し、「ショタ」とは、「主に女性向けの、可愛らしい少年を扱った作品ジャンル」(同上)を意味する。「腐女子文化」とは、これらの作品を愛好する女性たちによって形成される文化である。
- 3) 本稿では、小説等、活字メディアによる物語だけでなく、マンガやアニメ、ゲーム等のメディアによる物語も含めるため、カッコ書きで「物語」と表記している。
- 4) 文字化(トランスクリプト)を行うため、以下の表記記号を用いた。

表4: トランスクリプト記号

[]	同時発話・重複発話
=	連続発話
(・・)	小休止・途切れなど発話内・発話間の時間的感覚 (ドット(・)は約1秒の休止を示す)
—	音の引き延ばし
句点(。)	文の切れ目
読点(、)	語句の断続を明らかにする息つき
疑問符(?)	上昇音調
ハハハetc	笑い。笑いは音をカタカナ表記する (笑)音で示すことのできない笑い
(())	状況説明
[[]]	語句の説明
()	補足・聞き取りにくい語

- 5) バッキンガム(2006)は、メディア・リテラシー教育におけるこのような教育的アプローチを「保護主義

的アプローチ」(protectionist approach)と呼び、これに対し、学習者自身の実践や経験を中心としたアプローチを「学習者中心アプローチ」(student-centered approach)と呼ぶ。本稿で紹介した「青年期のリテラシー」という概念は、「学習者中心アプローチ」の立場から中学生・高校生のリテラシー教育を捉えようとする概念と位置づけられる。

文献

- バッキンガム, D. 鈴木みどり(監訳)(2006)『メディア・リテラシー教育——学びと現代文化』世界思想社。
- フィッシュ, S. 小林昌夫(訳)(1992)『このクラスにテキストはありますか? 解釈共同体の権威』みすず書房。
- フリック, U. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳)(2002)『質的研究入門——<人間の科学>のための方法論』春秋社。
- 速水健朗(2008)『ケータイ小説的。——“再ヤンキー化”時代の少女たち——』原書房
- 本田和子(1996)『交換日記—少女たちの秘密のプレイルンド』岩波書店
- 本谷千恵子(1992)折原みとの作品の世界——折原みに女子中学生のメッセージを読む——。月刊国語教育研究, 245, 19-24.
- 今田絵里香(2007)『「少女」の社会史』勁草書房
- 石田喜美(2007)「読者コミュニティ」の構築——同人誌コミュニティについての語りの分析から——。読書科学, 50(3/4), 94-104.
- 石田喜美(2008)メディア文化系課外活動団体における「部誌」の意味の構成——社会構成主義的パラダイムによるメディア・リテラシー教育に関する一考察——。筑波教育学研究, 6, 1-19.
- 金田淳子(2007)マンガ同人誌——解釈共同体のポリテクス—— 佐藤健二・吉見俊也編『文化の社会学』有斐閣 pp.144-153
- 窪田光純(2004)『同人用語辞典』秀和システム

宮崎あゆみ (1993) ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス——女子高におけるエスノグラフィーをもとに——. 教育社会学研究, 52, 157-177.

VACCA, R.T. (1998). Foreword. In D.E.Alvermann, et al. (Ed.), *Reconceptualizing the literacies in adolescents' lives* (pp.xv-xvi). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

米光一成 (2008) ケータイ小説の新しさと古くささ. 國文學, 53 (5), 22-29.

受付: 2008.11.11

受理: 2009. 2 .20

Literacy practice as a protection strategy for *one's own place*: An ethnography of a literary club at a Junior High-School

ISHIDA, Kimi (JSPS Research Fellow)

Abstract

In Japan, avid readers of a particular genre of media, such as manga, anime or computer games, are known as *otaku*. They have constructed a culture for themselves, which is referred to as *otaku culture*. The principle members in these cultures are young people, ranging from teenagers to people in their thirties. Accordingly, *otaku culture* is an important sub-culture within Japanese youth culture. This paper reports on ethnographic fieldwork conducted at a particular literary club where most of the members were *otaku girls*.

Specifically, the study focuses on conversations that took place within group interviews. The principle participants in the study are eight junior high school students. They are all female and members of the literary club at a junior high school. Six of the participants described themselves as *otaku girls*. The participants were informally interviewed by the researcher, who is also a member of the *otaku* community. The 45-minute conversation was tape-recorded for subsequent analysis. The researcher also took field notes. In addition, coterie magazines produced by members of literary and comic drawing clubs were employed as data sources.

Ethnographic analysis was conducted in order to describe how the *otaku girls* create meaning in reading/writing *stories*, and how they read/write *stories* in their daily practices. The results indicate that it is importance for teenagers to have their own *safe place*. Moreover, reading/writing *stories* is one strategy for creating such a place and of protecting that space against adult, paternalistic intervention.

The findings suggest that we should not consider teenagers' literacy practices from a perspective of secondary reading that positions such practices as being intermediate. Rather, we should them from an adolescent literacy perspective that investigates new literacy education based on adolescents' vernacular practices of reading and writing.